Japanese association of educational psychology

体験の質と創造性（2）

－環境問題解決着想力と体験の関係について*－

弓　野　憲　一
（静岡大学教育学部）

1．はじめに

新学習指導要領をでは、「体験」や「活動」を重視して、児童生徒に「生きる力」を付けさせることが求められている。

創造性研究の観点に立つと、生きる力の内容は多くの点において「創造性の育成」と重なり合う。生きる力を育むためには、現在の学校教育で重要視されている児童生徒の各種の体験が重要なポイントとなるであろう。しかし児童生徒のどのような発達段階の、どのような体験が必要なのであろうか？ そしてそれはなぜ必要なのであろうか？このような問いかけに対して観念的な理由はいざ知らず、これに十分こたえる実証的研究を見つけ出すことは内外において難しい。

以上のような問題意識に立って、昨年度はトーランスの①因果関係類推テストと、②空きカンの普通でない使用法テストの成績と創造的体験の関係を調べて、いくつかの創造的体験項目と創造性の高低との間に、有意な関係を見つけ出した。

しかし、昨年の創造性テストは、総合的学習とはかけ離れたテストであった。したがって本研究では、総合的学習に関連した現実世界の創造性、すなわち、「環境問題解決着想力」を測り、それの高低と小中高大学時代の自主的に行った体験がいかなる関係にあるのかを調査する。

2．方法

被験者　大学生157名（男子 73、女子 84 名）

材料　**創造性テスト**：地球における環境問題を解決するためのアイデアを出すテスト。

創造的体験質問紙：創造的体験を測定する42項目の質問紙。

創造的態度質問紙：重桝ら（1993）によって作成された創造的態度質問紙の中から選んだ創造的態度を測定する38項目の質問紙。

3．結果

①男女の創造性について　環境問題を解決するためのアイデアを通常の「創造性テスト」のように整理して、思考の流暢性、柔軟性、独創性の3つの思考特性について評価した。その結果、3つの思考特性において男女間に差は見られなかった。

②創造性と体験との関係　まず、創造性を測るテストの思考別得点を基準変数、創造的体験についての項目を説明変数として重回帰分析を行った。その結果、小学校では「わからないことを確かめるために実験を計画して行ったことがある」「お金の使い方を決めたことがある」「替え歌を作ったり、作詞や作曲をしたことがある」等が、創造性と有意な関係にあった。中学校では「新しいゲームを考えたり、ゲームのルールを変えたことがある」「外国に住む外国人と文通したことがある」等が有意であり、高校ではそれに加えて「切手などの収集をしたことがある」が有意であった。

さらに、小、中、高、大学における創造的体験の多少によって被験者を上、中、下群にわけ、創造性得点の違いに差が見られるかも調べた。その結果、高校での流暢性と独創性の上－下群間、大学生における流暢性の上－下群間に差が見られた。

③創造性と創造的態度の関係　創造的態度質問項目を因子分析すると、6つの因子が得られた。それらの因子の中で、進取性因子が流暢性、柔軟性、独創性と．3以上の有意な相関を示した。さらに想像性因子も流暢性と独創性との間におよそ　．3の有意な相関があった。

この研究から得られた結果を教育に適用するとすると、「創造性を育成するには、創造的態度をほめなさい」ということができるであろう。

---

*本研究は、筆者の着想をもとに太田有加里（静岡大学教育学部）と実施した調査をまとめ直したものである。

NII-Electronic Library Service